

子どもの運動・スポーツ行動に対する母親の支援態度に影響を及ぼす要因の検討

—母親の運動・スポーツ価値意識に着目して—

スポーツビジネス研究領域

5012A016-7 木村 圭佑

研究指導教員：木村 和彦

I. はじめに

子どもの体力低下が問題となって久しい。子どもの体力に対しては親の子どもの運動・スポーツに対する支援態度(以下、支援態度)が影響を与えることが明らかにされている。しかし、これまで支援態度がどのような要因に影響を受けているのかは明らかにされていない。そこで本研究では支援態度にどのような要因が影響を与えているのか、特に「子どもの身体活動には親の身体活動に対する信条が影響を与えている」という先行研究(Stewart,2003;Brustad,1996)の指摘を参考に、本研究では支援態度に影響を与える要因として親の「子どもの運動・スポーツに対する価値意識(以下、価値意識)」に着目した。また、親の中でも子どもにとってより近い存在である母親を対象として研究を行うこととした。

II. 研究目的

1. 支援態度が子どもの運動・スポーツ行動に与える影響を検討し、支援態度に価値意識が与える影響について明らかにする。
2. 支援態度に影響を与える要因として、参与形態別価値意識と一般的価値意識を比較し、全体的なモデルの中でどちらの適合度が高いかについて明らかにする。

III. 研究方法

1. 測定尺度の作成

本研究では母親の運動・スポーツ価値意識測定尺度(価値意識測定尺度)、母親の運動・スポーツ支援態度測定尺度(以下、支援態度測定尺度)を用いて研究を行った。価値意識測定尺度は先行研究(青木,2003;中西,2012;水上,2000;奥田,1995;谷ら,2003;中井,2005;松永ら,2006)を参考に作成し、支援態度測定尺度はDavison(2011)のACTS-MG尺度を参考にした。

2. 尺度の検討

予備調査を行い、本研究に使用する価値意識測定尺度及び支援態度測定尺度の信頼性と妥当性を検討した。価値意識測定尺度については、従来の研究と同様に「一般的価値意識」及び「する」価値意識について尋ね、妥当性及び信頼性が確認されない場合には新たな尺度についても検討を行うこととした。

3. 支援態度に与える影響についての検討

支援態度に影響を与える要因について検討を行い、「一般的価値意識」と「参与形態別価値意識」を支援態度に影響を与える要因のモデルの中で適合度を比較した。

IV. 予備調査

1. 分析方法

確認的因子分析を行い、項目の削除及び α 係数、AVE、因子負荷量、因子間相関を用いて信頼性及び収束的・弁別的妥当性の検討を行った。

2. 調査概要

対象：東京都F市にあるW小学校の1~4年生の保護者
日時：2013年7月19日から9月10日
配布数：437、有効回答数は134
調査方法：質問紙調査

3. 結果と考察

価値意識測定尺度は弁別的妥当性が確保されず、一般的価値意識と「する」価値意識を混在した質問文では測定できないことが示唆された。そこで、価値意識測定尺度を「参与形態別価値意識」「一般的価値意識」の2種類に分けて本調査を行った。

支援態度測定尺度は先行研究(Davison,2011)と同様の項目の精選の結果、4因子15項目のモデルが示されたが信頼性及び妥当性に課題が残る結果となったため、本調査で再度検討することとした。

V. 本調査

1. 分析の枠組み

本調査では、まず支援態度測定尺度の再検討を行った。その後、先行研究(Stewart,2003;Janie,2013)を参考にJ小学校で得られたデータを基に一般的価値意識を用いたモデルを作成し、R小学校で得られたデータを基に参与形態別価値意識を用いたモデルを作成し、共分散構造分析を行った。図1に示すようにモデル適合度及びパス係数を用いて、支援態度に影響を与える要因として「一般的価値意識」と「参与形態別価値意識」の比較を行った。

2. 調査概要

対象：東京都F市にあるR小学校およびJ小学校の1

～4年生の保護者

日時 11月19日から12月10日

配布数：R小学校532、J小学校303

有効回答数：R小学校238、J小学校204であった。

調査方法：質問紙調査

価値意識に関する質問項目はJ小学校には一般的価値意識、R小学校には参与形態別価値意識について尋ねた。行研究(文部科学省,2009;Stewart,2003;Cherylら,2010;Davison,2011)^{3),5),12),55}を参考に「親の中学・高校での運動部活動経験の有無(以降、母親の運動部活動経験)」、「現在の親の運動実施頻度(以降、母親の運動実施頻度)」、「親自身がどの程度運動を楽しんでいるか(楽しみ)」、「子どもが運動することを親がどの程度重要だと考えているか(重要性)」、「子どもの平日の運動実施時間(体育の授業時間を除く)」、「子どもの休日の運動実施時間」といった質問項目を設定した。

3.結果と考察

支援態度測定尺度を検討するため再度確認的因子分析を行った結果、信頼性及び妥当性が確認することができなかった。そこで、探索的因子分析を実施したところ、3因子12項目の尺度が示された。それぞれの因子を母親自身が子どものお手本となり運動を実施し、促進する「ロールモデル」、運動・スポーツができる場所に連れて行くことや運動・スポーツの実施を奨励する「奨励」、パソコンやゲームといった座位中心の生活を制限する「座位生活の制限」と命名した。

次に、共分散構造分析を行った結果、一般的価値意識ではモデル適合度が CFI=.792,GFI=.916,AGFI=.816,RMSEA=.119、となり、モデルを採択できる基準を満たすことができなかった。

一方、参与形態別価値意識では CFI=.916,GFI=.923,AGFI=.861,RMSEA=.080 となり、モデルを採択することの出来る基準を満たすことができ、図2のようなモデルが作成された。「参与形態別価値意識」、「母親の運動実施頻度」、「母親の運動部活動経験」それぞれから支援態度に対するパスは有意であった。支援態度に対するパスでは、「参与形態別価値意識」のパス係数が最も高いパスであった。「母親の運動実施頻度」、「母親の運動部活動経験」は有意であったがパス係数は低い値を示した。「楽しみ」、「重要性」から支援態度に対するパスは有意ではなかった。

また、「一般的価値意識」に比べ「参与形態別価値意識」の方がモデル適合度が高かったという結果から、従来のように「運動・スポーツは…」という質問文で調査をすることの限界を示唆していると考えられる。スポーツ参加の多様化が注目される現代において、一般的な価値について尋ねられた場合、回答者によって

想像する参与形態が異なり、一般的価値が正確に測定できず、妥当性が低下してしまっていることが考えられる。今後は、多様なスポーツ参加に対応した価値意識の問い方が求められていると考えられるだろう。

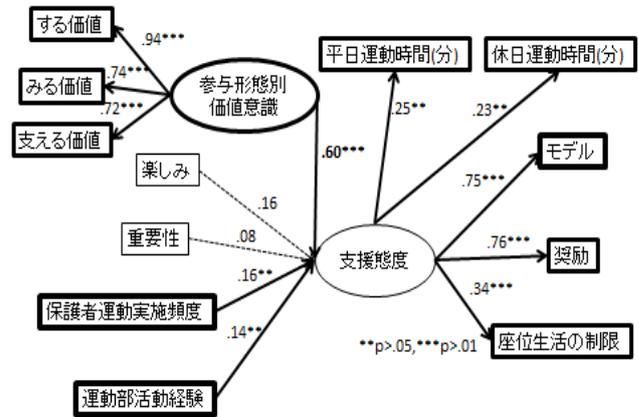


図1 参与形態別価値意識を用いた支援態度の影響要因

VI.まとめ

本研究の結果より、価値意識が支援態度に影響を与えていることが明らかになった。また、支援態度が子どもの運動・スポーツ行動に影響を与えていることも明らかになった。これまで、支援態度は母親の運動実施状況や基本的属性といった要因に影響を受けていることが明らかにされてきた。しかしながら、本研究では母親の運動実施状況や運動経験といった基本的属性などよりも、価値意識の方が影響が大きいことが明らかにされた。つまり、子どもの体力低下という問題を解決させるためには、母親の支援態度をマネジメントする必要がある。支援態度に価値意識が影響を与えているという本研究の結果から、母親に「子どもの運動・スポーツ参加によって得られる価値」を伝えることで価値意識を変容させ、支援態度を変容させることができる可能性が示唆された。特に、「運動・スポーツは…である」といった一般的な価値についてではなく、子どもが多様なスポーツ参加によって得られる価値について、母親が理解するようにする必要があるだろう。

また、支援態度に影響を与える要因として、「多様なスポーツ参加への価値意識」から問うことが重要であるということが明らかになった。これは、現代のスポーツ参加の多様化や、母親になることで自身がスポーツを「する」だけでなく、子どものスポーツを「みる」あるいは子どもがスポーツをすることを「支える」というようにスポーツ参加が多様化することが影響していると考えられる。